

展景

季刊

No.112



Winter 2024

目次

秋日〈短歌〉	……………	小野澤繁雄	4
振りかへる〈短歌〉	……………	河村郁子	6
錦繡の蔵王・山寺・茂吉館〈俳句〉	……………	新野祐子	8
身軽に〈短歌〉	……………	布宮慈子	10
老いのすなる〈短歌〉	……………	梅津純子	12
〈那須通信 57〉スケジュール帳から	……………	加藤文字	14
〈薫風颯々 31〉母校創立150周年の節目に	……………	神村ふじを	20

対詠 <small>（いさげんいかげ）</small> PART 88	……………	小野澤／河村／布宮	26
前号作品短評A	……………		28
前号作品短評B	……………		31
無二の会短信	……………		34
編集後記	……………		37

今号のイメージ／レンコン

秋日

小野澤繁雄

かたちから橋はいろいろ川渡る荒川水管橋アーチうつくし

ポツンと咲いている花は彼岸花元荒川川岸ことし遅れて

若者のドラマとしては近い時代高校時代親友も出て

長尺のベンチもありし頃モスに多く高校生らベンチ好き

秋日にもなれるその日々朝寒に昨日のわれがめざめるごとし

昼までの雨が上がって出る秋日ホールに聴いているブラームス

細々と苔がつづいているところわずかなれども家の裏庭

しる人にあつて一段落となる歩き吠えてこないかごんちゃんしる犬

土曜日の朝ともしれて沼畔はランドゴルフ掃き掃除から

鉄棒は一つクラスの逆上がり上がりならんで小学生ら

振りかへる

河村郁子

初詣と南天の葉の上^へに鯛をのせ仕来りどほり吉事^{よごしたの}待みぬ

睦月なかば義兄^{あに}のコロナ感染が姪と吾とに 監禁七日

月末に義兄の転倒起こさんと腰椎圧迫骨折負ひぬ

三月のわが誕生日には退院をと一途のぞみてりハビりに励む

八十歳代最後の一年貴重なり 先ずは十年日記のしめくくり

退院後は医療とりハビりに専念す 体育会系ひとり合宿

自らの身は自らが守るべき来しかた今までなかりし日常

猛暑にも気温変動にも負けぬ体調維持に成否こもごも

バイタルチェックに血圧計と体温計タニタの体重計たのもし

師走尽に十年日記を締めるあとAI時代への三年日記

錦繡の蔵王・山寺・茂吉館

香川の句友との吟行より

新野祐子

祓川わたり善人月夜茸

善人のあかし山葡萄と出会う

さわやかや讃岐の衆の心意気

雲海のかくまで広き眺めかな

火口湖の底に秋思を見つけたり

険谷より湯気立つ不思議ましら酒

異邦人憩う山寺天高し

野紺菊だれをも受け入れ五大堂

青げらの玻璃におどろく茂吉館

芭蕉考遺しひっそり銀漢へ

悼 天志さん

* 集合場所に現れなかった天志さんは、亡くなっていたことが後に判った。

身軽に

布宮慈子
やすこ

順ぐりに古稀といふもの迎ふれば身軽にならむと頭めぐらす
四年ものあひだ触れざる小屋の中おそるおそる開けてみむとす
梅干や胡瓜の塩漬、かりん酒と弟切草酒も土間に並びて
ありし日に家の誰かが飲む様を見しことあらず弟切草酒

小屋とふは異界のごとし何もかも呑み込み隠し時間を止める
あらかたの物を捨て去りわがこころ軽くなりゆく小屋とふ入れ物
小屋内の魑魅魍魎も退散し現実世界に近づきってくる
植え替へたるナツメヤシはぐんぐんと芯伸ばしたりヤシ科の高木
食べ終へし棗椰子の種を水に入れ遊びごころに眺めてをりき
秋の日にナツメヤシに留まりゐしトンボの身軽さ思ふしばらく

老いのすなる

梅津純子

老いのすなる白内障の手術をばわれもしてみむとてするなり

週に三冊図書室の本読まむとし疲れ目赤き五年生なりき

戯れの老眼鏡に鮮明な文字が飛び込む四十五歳

左右合はぬ老眼乱視の進行に作り重ねる眼鏡の五本

老父母もあの老^{らう}この老手術せる白内障はいと易からむ

あな恐ろし手術説明同意書に失明といふ例までありて

術後七日土仕事厳禁とふ冬近き庭の雪囲ひ急ぐ

白内障には退院日和と看護師は小暗き窓の雨に眼をやる

白内障術後十日の満月は正視もできぬ輝き放つ

ひと月の間を置き左右の眼の手術眼鏡使へぬ苦痛の長き

スケジュール帳から

加藤文子

毎年秋になるとスケジュール帳を注文する。見開きで一カ月が見渡せて、一日ごとに升目で仕切られている。勝手が良いので同じタイプのをずっと使っている。

予定を書き込んだり、主に植物に関してだが、行ったこと、気づいたこと、天候などを記す。小さな升目にごく簡単に書いておく。

たとえば、春や秋の植え替えや施肥に関して、また防寒のため温室に取り込んだ盆栽を春からどんなふうに外棚へ移したのかなど、反省事項も併せて日々記録する。

長年メモした事柄を参考にしてきた。なんでもないようで、けっこう役に立つのだ。もう少しでスケジュール帳は、四十冊目になる。

新しいのが届くと、それを手にすると、どんなキレイに出会ったのか、これから綴られる未知のでき事に思いが膨らむ。さっそく一月から十二月、それぞれのページの上方の余白に、昨年から今年、



今年から来年、申し送りのように、忘れてはいけない各月のテーマ、要点を書き写す。

一月の余白には、。冷え込みピーク十日頃から二月下旬。外仕事は十一時頃から二時がベスト。ペゴニアの開花二十日頃。午後四時三十分でも明るい。野草の古葉整理。実を取り除く等、注意を促せばと思えば自分でみて判るようなカタチでとりとめなく書いています。

那須は新年を迎えてからしばらくはおだやかに過ごせる。ホンワカ気分していると、半ば頃から寒さは厳しくなり、大雪に見舞われたりして、仕事も思うように進められなくなる。交通事情から約束ごと延期になったり、予定が立たなくなることも多いのが一月だ。

陽気に惑わされず、できなくなってから後悔しないように、するべきことは済ませておく。これが肝心。

メモに照らし合わせて、月々の流れを思い出しながら、優先順位を考えて過ごすようにしている。一年のめぐりをかいつまんで記してみると……。

●二月から三月：寒のあいだをぬって用事をすすめる。春からは盆栽の作業が忙しくなるので、オリジナルカレンダーの制作をはじめ、初夏の展覧会や自宅の別棟で四月から十一月まで開く週末のギャラリーの準備を行う。

●四月から五月：いよいよ春到来。余白の書き出しに、やることいっぱいがある。冬眠から目覚めた植物たちの活動はめざましい。動きに合わせて、植え替え、手入れ、虫対策、水やりなど庭仕事

に追われる日々がはじまる。

●六月：風もさわやか、みどりが眩しい。日射も強くなるので、庭の中央に寒冷紗を張る。

●七月から八月：蚊取り線香にむせながら、暑い暑いと言って水やりや草刈りに勤しむ。てぬぐい大活躍。暑さに気をとられて水やりを怠らないこと。

●九月：寒冷紗を取りはずす。春に行えなかった盆栽の植え替えと施肥。暑さも和らいで秋風の立つな静かな気持ちで植物と対面する。春からの成果、それぞれの良いところに気づける愉しみな季節。虫の音と一緒に、手入れする鉢の音もよく聞こえる。

●十月から十一月：温室へ盆栽を取り込むための段取りを組む。温室内の清掃、棚洗いなど。寒のおとずれに合わせて、取り込み開始。

●十二月：取り込み終了。水やりは昼前後、暖かな時間帯に行く。年賀状書き、一年の締めくくり、細々した片づけ、大そうじ。今年の無事に感謝して神棚をあらたにして、新年を待つ。

いちじるしい気候変動は、盆栽の生育にも影響を与えている。それに伴い、育て方など内容も変わってきた。

スケジュール帳に記した雪マークは少なくなった反面、厳寒期は長い。加えて年間通じて雨マークが増え、晴天の日は減少傾向にある。

記録をみていると、どうしても地球環境のことに思いが及んでしまう。何を……どうすれ



ツキヌキニンドウ ある日のクレイ

ば……。ささやかでも、改められること、できることを思念する。地球をおかしくしていることには、なるべく加担しないで過ごしていきたい。自然にそうしていただける自分でありたいと願う。

母校創立150周年の節目に

神村ふじを

母校の小学校の教頭先生から突然電話が入った。PTAの役員に話をしてほしいとのことだった。母校が創立150周年を迎えたので、卒業生である私に学校の歴史などを含めて、「何でもいいから話してくれ」とのことだった。

「何でもいいなあ？」「何でもしえっす」「何でもいいげば……」ということでも話をする事になったのだが、蓋を開けてみたら、保護者の授業参観の日に話をする事になっていて、役員研修ではなくなっていた。保護者全員という、大人に話をするという大変なことになっていたのだった。

元々小学校の教師なので、子ども相手の話は何とかできそうだが、大人に話すとなるとやはり気が重い。大体教師の話などというのは面白くないのに決まっている。1時間も我慢してもらおうのは辛い話だ。

けれども引き受けてしまったからにはしょうがない。母校の歴史についてもすべてわかっているわけではないので、勉強する機会をもらったと思ひ直して、町史にも目を通したり、創立100周年の記念誌を繙いたりしながら、話を組み立てようと思った。

私の母校の左沢あてらさわ小学校は、明治6年の4月10日に開校した。今年で150周年の節目の年になった。私の住む地区の中では一番早かったので、「第一番左澤学校」と称して、町の人のその誇りたるや凄まじいものがあったようである。第一番左澤学校から遅れることひと月、隣村に学校ができ、それから次々と周辺の町村に学校が広がっていった。

明治新政府は、1872年（明治5）9月4日に学制を發布し、全国に5万4千余りの学校をつくると宣言をした。地方においては、教育に対する温度差や財力など地域格差があり、相当な時間をかけて全国津々浦々まで広がっていったのだろうと思われたが、調べてみると意外に早く学校が浸透していったようである。その背景には、寺子屋に似た「郷校」と呼ばれるものが各地にあったことが大きく影響しているようだ。

また、時代背景を見てみると、1853年（嘉永6）、ペリーが浦賀にやって来て、煙を吐く重い鉄の船がプカプカ浮いているのを市民は驚きの目で見ているし、長州藩が下関戦争で英仏蘭の軍艦からバガスカと大砲を打たれて大敗してしまうという衝撃的な出来事もあった。ヨーロッパ列強との歴然とした国力の差を目のあたりにした新政府が、教育に力を入れなければならないと痛感し

ていたことは容易にわかる。

かたや戊辰の役で負けてしまった諸藩も、教育に力を入れるべきだとの認識が広まっていたようだ。

奥羽越列藩同盟の雄藩長岡藩は、7万4千石から2万4千石に減封されてしまい大変困窮していた。そこに支藩の三根山藩から米百俵が送られてきた。いわゆる「米百俵」の逸話である。家臣たちは大変喜び、これで明日の米には困らないと思う間もなく、大参事小林虎三郎は、「百俵の米も、食えばたちまちなくなるが、教育にあてれば明日の一万、百万俵となる」と藩士たちを諭した。藩士たちは、この虎三郎の態度に今にも掴みかからん勢이었다そうだが、虎三郎はこの政策を押し通し、「国漢学校」を設立した。

これが後に山本五十六のような人物を輩出するのだから、米百俵をただ食ってしまったら、どうなっていたかわからない。

戦争に勝った新政府側も負けた幕府側も、これからの教育の必要性を強く感じていたのは間違いないように思う。

そのような時代背景があつて、学制発布から3年後の1875年(明治8)には、計画とほぼ同数の学校が創立されたようである。ただ、就学した児童は、学齢に達した児童の約半数に満たなかった。特に女子の就学率が極めて低かった。「女に学問はいらぬ」という思想が沁みついていたのだらう。

左沢に早く学校ができたのには理由があつて、一つには庄内松山藩の飛び地の城下町であり、「郷校」があつたので、教師を確保しやすかつたことが挙げられる。二つめに、廃藩置県となり陣屋が機能しなくなったので、それを学校として使うことができた。三つめに、最上川の舟運で栄えた左沢の人たちには、何よりも教育に対する熱い思いと財力があつたからだと言われている。

生徒三百名余、教員は、松田彦三、大谷哲造、多々倉和一郎、世話掛五十嵐信可を以て初めとなし、経費は生徒の授業料と人民有志積立の利子のみを以て之を支弁。故に教員は微給。書籍器械は整はず、教場には畳を敷き、従前の平机を列ね、子弟之に座し、以て講話をなせり。然れども此の時に当り、西村山郡中未だ小学の設もなく本校実はその嚆矢たる故に、第一番学校と称して最も隆盛の名を得たり。

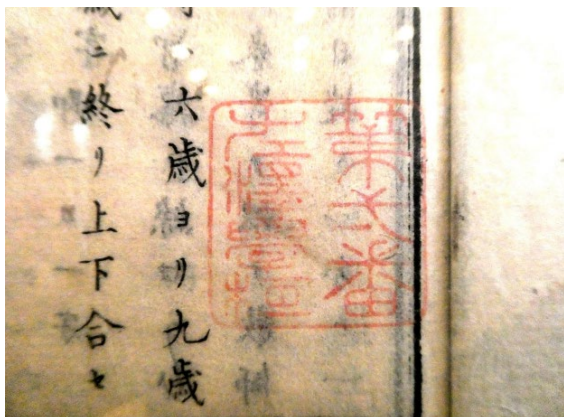
教員は「薄給」ならぬ「微給」であつたが、この記録には、第一番学校と称した左沢の人たちの感慨と自負が溢れている。

その左沢小学校も少子化が進み、全校児童数220名まで減ってしまった。それにコロナが拍車



第一番学校・旧松嶺藩陣屋

陣屋を学校に改築している時の記録



「第一番左澤学校」の印が押された教師用の本



1988年（昭和63）の移転まで使われた校舎

を掛け、町全体でも出生者数が激減している。
超少子化、AI社会への対応、不登校・問題行動、特別に支えが必要な児童の増加等々、学校における指導の中心であった「読み書き算盤」だけでは、これからの社会を乗り切っていけない。
創立150周年の節目は、学校教育変革の大きな節目でもあると悟った「第一番左澤学校」のPTA講演会であった。

小春日の笑ひの取れぬ講演会 ふじを

N K O
 小野澤繁雄
 河村 郁子
 布宮 慈子

心決め二足歩行に専念す 菩提寺往復五千歩なりぬ 10月28日 K
 久びさに勢至堂への道ゆけば前の荒物屋なくなつてをり 11月10日 N
 どうかして線路に草はかまわれぬ残っているや幹線ででも 11月14日 O
 わが犬と散歩の途に愛でるしも露草月見草この年も見ず 11月16日 K
 わが車に冬タイヤを履かせればいよよ来るなり雪の予報が 11月22日 N
 合併で少なくなりしと説明は道路元標これともひとつ 11月27日 O
 散歩みちに散り敷く枯れ葉は花水木わびつつ踏みて音を楽しむ 11月30日 K

色づきて落ちる紅葉あざやかに歩道にありて冬の入り口 12月6日 N
 咳をして若い人ともしれるやと自転車の人追い抜き際に 12月10日 O
 歯科女医が帯状疱疹顔に出てひつそりとペインクリニツクへ 12月20日 K
 この国にワクチン神話の根強くて理解されざるワクチン後遺症 12月24日 N
 臭覚がなくなつてから幾日間これもひとつの引き算の世界 12月27日 O

2024年

つぎつぎと新型ウイルス出現し人類史上のマイルストーン 1月9日 K
 七尾市の知り合ひの無事告ぐるときメーリングリストは体温をもつ 1月12日 N

●紫も白花もあるホタルブクロ烏瓜にも黄の実もあらむ

梅津純子

「も」が四カ所でつかわれたが、一首に意味は通っていて、面白い云い方でもある。「も」の意味は、並列や付加。格助詞の「に」に並列や列挙、強調の意味を加えることがある。「烏瓜にも」で、加えた意味は当然だろうか。ホタルブクロにはピンクもある。烏瓜で黄の実が歌（詠）われていないこと、などに触れたあとでの歌である。

白き糸の花（一首目）、真白きレースの花（二首目）もこの烏瓜のもの、庭の花。

歌に手順があつて、〔亡き父のもの〕牧野（の索引）も引かれる。それが朝ドラの後（六首目）。じつのところ作者の調査で、これが〔花も葉も此は似て非なる〕黄烏瓜（きからすうり）であることがしれる。またその塊根（のデンプン）があつた汗知らず「天花粉」の原料になることもしる（後ろの二つの歌）。これらプロセスが一連になった。読み手にもついてゆく面白さがある。疑問と解明のそのあとに、これ、

雌雄異株なればレースの白き花黄熟の実を結ぶことありや

●除草後の丘に一羽のオスの雉往きつ戻りつ一声もなく

大橋千佳子

歌が対にもなっているように、おおよそ歌を受けた歌がある。そうやってみえてゆく世界がある。オスの雉、地味なメスの雉はむしろいられていない。この歌には、この歌、

雉一羽大樹の下の叢に在りし我が巢をただ捜しおり

除草作業の歌は、それらの歌の直前にある。

炎天下緑の波を倒しゆくシルバーさんの斜め横隊

一連タイトルは「炎天」。シルバーさん、はシルバー人材センターの人。緑の波を倒しゆく、は比喩的な云い方だが、「丘」に対してのものか、ゆたかなものがある。七、八首目は庭でのじしんの作業（中のもの）。コニシキソウ、モスキート音の表記も目をひく。九、十首目は絵画展のもの。槐多の自画像、屏風絵の業平に独自の把握がある。ガランス硬し、また、日本男子五等身なる。ガランスは槐多が好んでつけた色だという、深い茜色。

●ステンレスの銕もよいと使ひしが鋼の裁ち銕をいかにせむ

布宮慈子

鋼の裁ち銕、は手もとにあるものか。裁ち銕はわが家にもあるが、裁縫はしないので、使う機会がない。いかにせむ、は研ぎの問題があるということ。一連タイトルも「研ぎ」。二首目から、研ぎ屋をさがしたようだ。われのラシャ切り銕（三首目）、が有名な庄三郎でないことの断りがあり、

これは面白い。ネット検索では、裁ち鋏で庄三郎がすぐに出てくる。裁ち鋏、は布を裁断する洋裁の道具。

四十七年前に求めし鋏にて研ぎに出さむと荷物をつくる

荷物をつくる、に手作業のイメージがある。ユーチューブの紹介で決まった研ぎ屋（群馬県桐生市）、このことのやりとり、評価が後段の歌になっている。

あらためて整理された云い方、洋裁熱、この十首目はいい。

あらためて道具はたいせつ稲穂垂る季節に洋裁熱は上がり来

前号作品短評B 〈慈子〉

●椅子三つ夕のすずみをしているか路地の奥にも兄弟がいて

小野澤繁雄

「夕涼み」と題する一連。昭和の一場面を見るようである。東京の下町、寅さんの帰ってくる場所のような路地。しかし、そのような郷愁を覚える設定ではないのかもしれない。現代における夕涼みは、どんな場面なのだろうか。読む側の想像によってずいぶん変わってくるはずだ。

出てみると乗り合うことのあることに人のカラダがこんなに近い

電車やバスなど、乗り物を指しているのだろう。混んでいなくても次の客のために一人分と思う座席を確保し、座る。また立っているとしても、ゆとりをもって立つことは稀だ。たまに外出してみると、他人の体が近くにあることに驚くのだ。家族よりも密着した状態で運ばれていく乗り物。具体的に何もいっていないが、「乗り合う」という表現から公共交通機関を指すことはほぼ間違いない。「こんなに近い」という驚きが、逆に作者の日常を映し出しているといってもよい。

●秋立つに猛暑収まる気配なく熱中症への備へはつづく

河村郁子

立秋を意味する「秋立つ」と暦の上ではなつたけれども、まだ熱中症に注意しなければならぬ、

この夏は。まったくもって猛暑・酷暑の夏であった。ちなみに、立秋とは毎年八月七日ごろ〜八月二十二日ごろにあたるが、日付が固定されているわけではないという。

灼熱の敷石のすき間に緑這ひ雑草くさの力が励ましくるる

焼けつくように熱い敷石の間に緑が見える。雑草のなんと強いことか、その強さが自分を励ましてくれているように思える。なるほど、草は夏のあいだも太陽の熱を思い切り吸収しているように伸びる。暑さに参っている場合ではない、と草に教えられた作者である。

犬の散歩に朝はつゆ草夕方は月見草愛でし 見当たらぬなり

かつて犬の散歩をしていたころは、早朝には露草をまた夕刻は月見草を美しいと思って見ていたが、ことしは見かけない。どうしたのだろう。今まで当たり前と思っていた季節感が、すでになくなっているのではないかと不安をうたっている。

●聖五月クマの依代よりしろ伐られおり

新野祐子

「聖五月」は、キリスト教のマリアの月であることから五月の美称。もとはカトリックの「聖母月」に発して「マリア月」ともいうそうだが、ここでは深い意味はない。「依代」は、神霊が現れるときに宿ると考えられているもので、樹木・岩石・御幣ごへい・動物などが祀られる。原始宗教（アニミズム）では、この世に在るものすべてに魂が宿り、それが神となり精霊となり人々の暮らしと密

接な関係を持つと考えているようだ。クマの崇高な感じと山で失われてゆくものへの残念な気持ちが一旬を支えている。

夏負けの毛並を晒すテン・キツネ

山百合の盗られししじま広がりぬ

わかりやすい旬。夏のひどい暑さは、山にいる動物たちへも大きく影響し、見すばらしい姿になつていたという。逃げ場のない気候の変動は、等しく生き物に降りかかり、同じ時を過ごしているのだと気づく瞬間である。テンやキツネが人間のように「夏負け」したというのが面白い。百合が盗まれてしまって、元あった場所が静まりかえっている。それを見る作者の心にも空洞が生まれただ。

◆黄烏瓜その後——前号に詠った我が家の黄烏瓜は雄株だったらしく、実ることもなく秋の深まりとともに枯れ果てた。今は高さ二・五メートルの南天の木に、黄土色に枯れた直径三ミリほどの蔓（茎）だけが切れ切れにからまつている。来年は雌株の黄熟の実に出会いたい。それにつけても赤い実の烏瓜を見たことがない。山形県内にあるのだろうか。烏瓜の花は黄烏瓜に似た白いレースの花のようだが、夜に咲いて朝方には萎れるという。いつか「熟れた真つ赤な烏瓜」を見て詠いたいものだ。

梅津純子

◆十月の中下旬に、同居する子と時間差でコロナに感染した。外出自粛をし、人と距離をとり、手指を消毒し、といろいろ注意し、ワクチン接種も数を打っていたところ、今さらとか、なんで、とかいう気分もあった。子の数日後に発熱した。そこまでの緊張感は息苦しいほどだったが、じぶんも感染したことで、むしろ気が楽になり、以降仲良く世話をしあうことになった。やさしくもしてもらった。発熱期間はほぼ三日、ともに咳が残ったが、じぶんには臭覚がなくなった、ほてり、な

ども残った。味噌汁に味噌の匂いがしない、コーヒーに香りが無い、洗濯物の汚れ具合が匂いからはわからない、など引き算の生活である。臭覚は、三週間後になんとか戻ってきたが、いずれにしても、感染したことで、何か一区切りというか、一段落というかした感じがしたのが不思議だ。子と二人でのり越えた感じもある。

小野澤繁雄

◆凄まじい暑さのお陰で、農作物の出来が非常に悪かった。秘伝豆などは収量がほぼ半分。白菜、青菜も不出来で、砲弾のようになるはずの白菜は、未だにザゼンソウくらいの大きさで玉にもなっていない。遅くまで暑さが続いていたせいも、本当に出来が悪かった。でも玉にならない白菜にも楽しみがある。冬を越して春になれば臺が立って美味しい莖立になるのだ。来年は呆れるほどの莖立が食卓に並ぶかもしれない。「ためいき啜の出る畑仕事小六月」

神村ふじを

◆年齢とともに時のたつのが早く感じられます。二〇二三年はことさら早かったように思います。志した成果は皆無でしたが、生命を保ち負傷を癒せたことには感謝しなければなりません。「展景」には編集部の励ましを頂き、復帰することができました。お陰で結社誌への出詠も叶えられ、歌づくりが続けられています。急がず転ばず何事にも用心ファーストで歩んでまいります。

河村郁子

◆イスラエル軍によるガザの人々の虐殺が続いている。十月七日以降の新聞は、見出しも写真も残酷すぎて正視することができない。イスラエルは正々堂々とパレスチナへの蛮行を繰り返している。怒りが込み上げる毎日だ。最近読んだ文章の中で、「世界」二〇二三年三月号の「『人権の彼岸』から世界を観る」（岡真理 著）が最も印象深い。「この一年、ロシアの侵略に対する非難とウクライナの人々に対する共感がメディアに溢れ、平和学習がとにかくに興隆した。かたや中東のメディアに溢れるのは、欧米諸国の二重基準に対する批判だ。侵略を非難し、その犠牲者に共感するのは正しいが、平和を唱えながらこの二重基準の問題を等閑視することは、平和よりむしろその破壊を援けるものである」と論考は続く。欧州ではウクライナ難民は受け入れるがシリア難民は拒絶、というように人種差別は植民地主義の時代と変わらない。メディアはガザでの大規模な攻撃があった時しか報道しない。日本のほとんどのメディアも欧米に右ならえなのは嘆かわしい。プーチンを悪者にするのなら、欧米の二重基準も同じくらい問題にしなければならぬと、岡さんは主張する。その通りだと思う。今も世界のどこかで蔑まれた民衆が蹂躪されている。私たちに何ができるのか、途方に暮れるこの頃だ。

新野祐子

編集後記

◆イスラエルのガザ攻撃に怒っていたら、日本の二〇二四年はたいへんな幕開けとなった。一日は能登半島で大地震、二日には羽田空港で日本航空と海上保安庁の航空機同士の衝突事故。ニュースを追うだけで精一杯。気持ちが付いていかない。能登の地震では当初、七尾市にいる知人の安否がわからなかった。四日になって、ケータイも何も持たず近くの高校に避難していることが確認できた。が、なんともこの寒空が恨めしい。

能登半島には志賀原^{しか}発があり、そちらも気になっていた。北陸電力は正確な情報を出さず、小出しに訂正している。やはり不具合が出ており、津波も来ていたのだ。元京都大学原子炉実験所助教の小出裕章さんへのインタビュー記事を紹介したい。

「小出裕章が語る能登地震と原発」

<https://note.com/kuwa589/n/nf745c45cb244>

この災害のあとに政府が何をもち出すか、気をつけたほうがよさそうだ。110号の新野祐子さんの次の句が、いみじくも警告を発している。ショック・ドクトリンとは、社会に壊滅的な惨事が発生した直後に、人々が茫然自失している時をチャンスと捉えて巧妙に利用する政策手法だという。

『シヨック・ドクトリン』地図広げつつ読む日永

*ナオミ・クライン著『シヨック・ドクトリン——惨事便乗型資本主義の正体を暴く』

さて、同人・市川茂子さんのことをお伝えしなければならぬ。昨年十二月、甥の方から電話をいただいた。市川さんは十一月半ばごろから入院し、その後、亡くなられたそうだ。「展景（の歌）にあった屋形船と一緒に乗った甥です。みなさんにもよろしくお伝えください」とのことだった。市川さんは秋田県出身で、東京の板橋区に長く暮らした。展景の最初の主宰者・布宮みつことは板橋区短歌連盟で知り合ったと聞いている。みつこを先生と呼んで第25号から参加し、ずっとお付き合いをしてくれた。九十歳になるころだろうか、原稿が来るたびに覚悟のようなものが感じられた。お連れ合いを亡くしてから一人暮らしを続けて、立派な最期であったと思う。享年九十一。市川さん、本当にありがとうございました。

◆「展景」の冊子は今号で終わり、これからはインターネット版のみとなります。

〈おすすめ本〉

・『ホロコーストからガザへ——パレスチナの政治経済学』（サラ・ロイ、岡真理・小田切拓・早尾貴紀編訳、青土社、二〇〇九）

（著者のサラ・ロイは、ホロコースト生き残りのユダヤ人を両親にもつ。イスラエルによるパレスチナの占領体制をガザ地区に焦点を当て経済面から詳述。読者として、前半はよくわかるが少し難しい。ところが後半になると俄然ひき込まれる。特にサラ・ロイと徐京植ソッキョンシクの対談では相互に深く語られる。著者は、個別的なものと普遍的なことをともに結びつけることが最も重要だという。パレスチナ問題が肌感覚でわかり、最後まで読み通した。本を読んでも虐殺を止めることはできないが、理解の助けにはなる）

・『理想の父にはなれないけれど』（じゃんぼる西、KADOKAWA、二〇二二）
（フランス人妻との間に男児二人を授かった漫画家の著者。子どもたちの成長を父親の目線で描いた子育てコミックエッセイ。子どもを素直に観察するところなるか、と楽しく読める。妻はジャーナリストの西村カリンさん）

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。
61号からのバックナンバーも読むことができます。

季刊展景
112号

二〇二四年一月二十日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形市上町二一七—二〇二

info@muninokai.com